

先生が喘ぎながら、俺の首筋を舐めている。彼は俺と目が合うと、少し恥ずかしそうに目を伏せた。

「なんです？私だって性欲ぐらいはあります」

「えっと、先生は早く済ませたいのかと思ってたから……ちゃんと前戯からしてくれるんですね」

「は？当たり前です」

先生は鼻で笑うと、こちらを小ばかにしたように見た。

「私を見くびらないで下さい。私はあなたよりも長く生きてますし、社会経験も多いんですよ。婚約者以外とセックスするのは大変不本意ですが、これも教師のつとめ。ちゃんと責任もって、あなたを気持ちよくさせますよ」

先生はネクタイを緩めると、こちらを見下ろした。先生の目元が赤い。先生は俺のズボンをずらすと、パンツをめくって、俺のチンポを取り出した。先生はチンポを見て「はう♡」と奇妙な声をあげると、チンポにしゃぶりつき始めた。その手慣れた動きに、俺はビクビクビクッと反応してしまう。

「ッッ〜♡せんせえっ♡なっ、急にすごっ♡」

「んほおっ？♡ほおれふかあ？♡（そうですか？）」

「んっ♡そこで喋らないでッッ♡♡」

先生はあんなにプライドが高そうに見えたのに、俺のチンポを自分から舐める淫乱教師だったみたいだ。

じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽ♡

「はあっはあっ♡やっ♡こんなつもりじゃ…♡あなたに触られると、なぜか体がおかしくなっ♡それに♡私の婚約者は男です♡だから、その♡お、おチンチン舐めるのが慣れてるだけで…♡それだけなんです♡」

「へえ♡いつもは旦那さんのチンポ舐め舐めしてるんだ？♡先生ってそういう趣味の人？♡」

「♡それは…♡」

淫乱教師はハアハアと荒い息をつきながら、こちらを物欲しそうに見つめている。

「違います♡私はその……そういう趣味なワケないじゃないですかッ！」

「じゃあ、なんで旦那さんのチンポしゃぶってるんですか？」

下に体が落ちて、更に差し込まれるチンポに、快感が走る。

「アッ♡待って♡まだッ♡これ♡すごっ♡俺、俺♡なんもしてないのにい♡」

「嘘を言わないで下さいよ。あなた自分で、私の上で跳ねてますよ♡最初の突き上げ以外、あなたが私の上で跳ねてるんですよ♡♡」

「やっ♡だって、気持ちいい♡はあっ♡これ深いところまで入るう♡良い♡良い♡」

ズチュッズチュッズチュッズチュッ

パンパンパンパンッ♡

俺はすぐに達してしまった。ビュッビュッと出た精液が先生のお腹にかかる。先生はそれを愛おしそうに見つめると、精液を手ですくって舐めた。

俺はお尻からチンポが抜けた後も異物感が凄く、立てそうになかった。でも、このまま淫乱変態教師といるのも身の危険を感じる。俺はなんとか残った力でベッドの上を移動しようと舌。

すると、先生が俺の腰をグイッと掴んだ。俺が慌ててシーツに捕まると、先生はうつ伏せの俺の上に覆いかぶさってきた。

「誰がこれで終わりだと言いましたか？♡」

「えっ……」

「私まだイって無いんですよ♡こんな中途半端で終われるわけないですよね♡」

「えっ！？ちょっ♡」

「さっきのは準備体操です♡今から、あなたのアナルに私のおチンチンを挿れて、めちゃくちゃにブチ犯しますから♡ほら、さっさと諦めて下さいよ♡」